

## [027] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10242>

---

出版情報：語文研究. 27, 1969-06-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

◇学会 彙報

▼講義題目 昭和43年度第二学期

(大学院)	国語学特研(日本靈異記)	春日	教授
(大学院)	全 演習(万葉集卷廿)	春日	教授
(学部)	全 特講(近代の文法論)	春日	教授
(全)	全 講義(概論—音韻について)	春日	教授
(学部)	全 講義(概論—音韻について)	春日	教授
(大学院)	国文学特研(文人趣味の研究)	中村	教授
(全)	全 演習(都賀庭鐘の作品)	中村	教授
(大学院)	全 講義(近世小説史)	中村	教授
(学部)	全 講読(雨月物語)	中村	教授
(大学院)	国文学特研(文学史研究の諸問題)	今井助教授	
(大学院)	全 演習(源氏物語末摘花卷)	今井助教授	
(全)	全 特講(平安女流文学)	今井助教授	
(全)	その歴史的基盤)	今井助教授	
(全)	全 特講(近代作家研究)	重松	教授
(全)	国語学臨講(国語史)	池上	教授

▼昭和43年度卒業論文題目

学部

平安中期における歌人意識について

—類歌をめぐる一考察—

平家物語(龍谷大学図書館蔵本)における

劇的局面の主要な傾向と特徴

曾根好忠の歌風について

中島敦論

石川	靖代
板坂	耀子
鹿川	留美子
香月	設子

和泉式部日記における三人称的叙述と  
超越的視点についての考察

玄鶴山房論(新時代とその限界について)

大和物語の研究

風土記の地名音について

後撰集前後における笑いについて

西鶴の敬語

道草論—漱石と健三の思想的距離を中心として—

「西行上人談抄」における西行の歌論

類聚名義抄における漢字音の仮名表記

—凶書寮本名義抄を中心として—

「夜の寢覚について」

樋口一葉研究

源氏物語に於る「形式」について

大宰治と聖書と愛

▼新入会員歓迎会 昭和43年11月2日

志賀島へピクニック、参加四五名。

▼卒業論文構想発表会

昭和43年12月7日 午後一時より 於二〇七番教室。

上大道	正
空閑	俊親
工藤	重矩
小柳多恵子	
椎野	俊頭
塩塚	明子
島	潤二
杉野八重子	
田尻	英三
立石	早子
平原	恵子
堀越	香子
溝口	悦子

註

- (1) 日本教文社版、「ユング著作集Ⅲ」江野專一郎訳による。  
 (2) 「芭蕉―その鑑賞と批評―」  
 (3) 「芭蕉読本」研究篇  
 (4) (5) 「解釋と鑑賞」昭和三十八年五月号  
 (6) (7) 三省堂版「芭蕉講座」第七卷書簡篇  
 (8) 「解釋と鑑賞」昭和三十九年七月号 弥古管一「時代観―「あらたふ」との句をめぐる―」参照  
 (9) (10) 岩波新書「日本文学の古典」

▼ 受贈雑誌 昭和43年7月～12月  
 文学・語学 48～50、文学 7～12月、国文学（関西大）43、国文学 9～15、解 158～164、都立大学方言学会会報 24～26、相模女子大学紀要 30、国文目白 7、人文研究 39、立教大学日本文学 20～21、語文 29～30、中央大学国文 11～12、白路 23卷 7～12、日本文芸論集 1、国文学改 47～48、中国古典研究 15、学苑 343～347 一稿論叢 59卷 6～60卷 6、肇国 309～312、短大論叢（関東学院女子短大）34～35、国文 29、国語国文 6～10月、大阪府立大学紀要 16、中世文芸 41、国学院雜誌 69卷 5～10号、文化と言語（札幌大学外国語学部）1卷 1、札幌大学紀要（教養部論集）1、成城文芸 50～51、文献ジャーナル 7卷 7～11、言語と文芸 59～61、音声学会会報 128～129、文学研究 65、東北大学文学部研究年報 18、日本歌謡研究 6～7、東京学芸大学国語国文学 3、国語と国文学 8～12、日米フォーラム 7～12、学園論集（北海学園大学）12、女子大國文 50～51、玉藻 3、試論（武蔵野甲南文学会）15、名古屋大学国語国文学 22、Moulin 22、静岡女子大学国文研究 1、大谷女子大学紀要 2、日本文芸論稿（東北大学文芸談話会）2、語文（大阪大学）28、国語学 73～74、国語と教育（大阪教育大学）3 高知女子大学国文 4、万葉 68～69、徳島大学学芸紀要 17、解 17、鑑賞 6～11、14、阿波路 39～41、文芸と批評 9～10、国語国文学研究（北大）38～40、文化 32卷 1～2、近代文学研究（法政大学）4、北星論集 6、コロニア文学 6、山口大学文学会誌 19卷 1、能楽思潮 47～49、実践文学 34～35、文学論叢 39、文芸研究 59、朝鮮学術通報 5卷 3～4、八雲 8～12月、国語国文学論文集 6、名古屋大学文学部研究論集 16 国文学 13卷 11～16・14卷 1

なお」の「お」の所に「おる（折）人は」の歌。「おきのうはかせ」の「お」の所に「おちつもの」の歌がある。これらも全て定家流の仮名の用い方に違反しない。「あきはなお（猶）」の「お」は定家流に一致しないが、定家以外の人（この場合合良経）が「なお」とすることは十分考えられる。そのまま正さずに「お」の下に歌をつけたものであろう。

- (8) 「藤原定家の仮名遣について」『国語学』72 昭和四十三年三月 『日本文学大辞典』別巻「下官集」の項。昭和二十七年四月。

- (9) 「仮名遣概説―定家仮名遣と契沖の仮名遣とを主とする史的研究―」『日本文学講座』（改造社）第十六巻、昭和十年二月  
(10) 石坂正蔵「下官集と親行の仮名遣」『橋本博士還暦記念国語学論集』昭和十九年十月に詳述。

- (11) 石田吉貞「拾遺愚草の検討」『学苑』200号、昭和三十一年一月  
建保四年に第一次成立。以後増補が重ねられて天福元年十月十七日以後「完成」したという。この説に従えば親行が「清書」を依頼された時期がどの時点であったかも問題となる。

- (12) 「藤原定家の研究」昭和三十三年三月  
(13) 「於此事者、依無理又無例、縁底忘、當時後代之禍乱、可被行古今無例之新儀、哉、竊難、有三ヶ之非、抛、若致、万機之懸望」者、以為一人「柱法」之謂、可「有」此議」

（久保田淳「新儀非抛達磨歌の時代」『国語と国文学』40巻12号所引、『玉葉』文治元年十二月二七日）  
当時類用されたことばであるらしい。

(一九六九 二、一一)

▼受贈雑誌 昭和43年7月〜12月 二

静岡女子大学研究紀要1、高崎経済大学論集5、明治大学教養論集44、45、城37、伝統と現代1巻4、演劇学9、山辺道14、人文科学科紀要（東大教養学部）都立大学方言学会会報25、美夫君志12、立命館文学266、276、近世文艺稿14、研究論叢（筑紫古文研究所）、連歌俳諧研究35、日本文学（東京女子大）31、国語学研究（東北大文）『国語学研究』8、龍谷大学論集383、387、香椎瀧14、甲大学文学会論集38、39、日本文学誌要21、文艺研究（明大）19、藤女子大学国文学雑誌4、社会科学（同志社大学人文科学研究所）3巻2、国文学研究38、日本芸術会報月報9巻4、文学芸術（共立女子大学文学芸術研究所）1、日本演劇学会紀要（早大・日本演劇学会）、萩原朔太郎研究会会報15、実践女子大学文学部紀要11、文学史研究（大阪市立大）10、古典評論（東風の会）4、古典と近代文学3、中世文艺42、日本文芸研究（関西学院大）19巻4・20巻1、別府大学国語国文学10、富士論叢13巻2、専修国文4、へいあんぶんがく2、上智大学国文学論集2、国語研究（国学院大、国語研究会）25、月刊文法1、3、樟蔭国文学6、九州大学文学部紀要（心理）11、論究日本文学34、滋賀大國文6、海事史研究11、文庫（阪大國文）19、